アジア神学セミナー秋学期第８回（2018/11/26）

現代社会とキリスト教２「聖書をどう読むか」

永野 茂洋

１．アジアにおける「キリスト教土着化論」から「民衆神学」への展開

土着化論（西欧文明化論）の課題の中に近代化と土着の民衆との間の政治力学的階級的な対立関係を射程に入れる→今日のアジアの神学を特徴付けた

２．民衆神学の課題

①抑圧と貧困というアジアの民衆の状況を神学的に理解すること

②聖書学的な民衆、およびイエスと民衆との関わりを明らかにすること

③それをアジアの民衆と教会の宣教との関わりに対比させること

④「解放の神学」の助けを借りてアジアの状況の中での民衆の役割を積極的に評価していくこと

３．宋泉盛（C.S.Song）の問題意識

西欧のキリスト教救済史観では非キリスト教的な国々の文化や伝承は、救済史によって克服されるべき「世俗世界」であり、かつ「辺境的・外周的なもの」としてしか評価されない。神学が西欧的キリスト教教義を核としている限り、非キリスト教世界（いわゆる第三世界）における教会の民族的、非キリスト教的独自性に受肉する福音の展開も、他宗教との対話も起こらない。既成の諸教会間におけるエキュメニカルな対話も創造的にならない。しかし非キリスト教的な国々の文化や伝承は本当に否定的な対象なのか？

→聖書における基本的な歴史理解（歴史観）は「断絶と分散化」。旧約では選ばれたグループは、断絶させられ、各地に分散していくことを通してたえず創造の業を進める神の創造を指し示す→この「断絶と分散化」を通じて非キリスト教的世界において働く神の業が顕在化してゆく→「民話の神学」へと展開

４．『出エジプト記』に登場する女性たちのエピソードをどう理解するか？

４－１．出エジプト記１：15～22（男児殺害の命令）と２：1～10（モーセ出生譚）における女性の活躍の話

・助産婦（シフラとプア）による嬰児（モーセ）救命の働きと知恵

・ナイル川へのモーセの遺棄→ファラオの娘（王女）によるモーセの救命

・モーセの姉の機転によるモーセの救命

４－２．モーセのミディアン部族への亡命（出エジプト記２：11～22）とツィッポラに

よるモーセの救命譚（出エジプト記４：19～20、24～26）

４－３．この女たちの物語は『出エジプト記』の中でどのような意味を持っているのか？このエピソードをどのようなものとして読むか？

＊ミディアンはケニびと
ケニびとはカイン（創世記４章）を名祖とする民族。創世記４：17 ではエノクはカインの子だが、25：4 ではエノクはミディアンの子。ネゲブ地方の遊牧民。士師記 1：16、4：11 にモーセの義父はケニびとであったとの記述がある

＊女たちの活躍は出エジプト記の中での不協和音を奏でた？
モーセの姉ミリアム→女預言者ミリアムの「海の歌」（出エジプト記 15：20～21）
それに対して、ミリアムの病気と隔離の記事（民数記 12：1～16）→祭祀資料の巻き返しによる軌道修正？
民数記 12：1「ミリアムとアロンは、モーセがクシュの女を妻にしていることで彼を非難して『モーセはクシュの女を妻にしている』と言った」→ツィッポラ（非ユダヤ人）はモーセの結婚相手としてふさわしくない？

５．『ルカによる福音書』６：39 のイエスの「盲人の譬え」をどう理解するか？

５－１．Ｑ資料のイエス語録から採用された「諺」→Ｑ教団における「諺」の扱いの位相がある（新約学の利用）
・Ｑ 教団→黙示家的熱狂主義とその後退を背景に、イエスの振る舞いを終末論的出来事としてロゴス化していった
・しかし終末の遅延により「人の子」の来臨が将来に期待されるようになり、それまでの教団のあり方（倫理）が「中間時の倫理」として要請されるようになっていた

５－２．ルカにおけるテキスト編集の文脈からの理解（自分の経験からの読み）
・ 結語（ルカ６：46～47）からルカの文脈の意図を類推する→「み言葉を聞いて行う者」を評価するという主題の中に語録を採用してまとめた？ →この「諺」の意味をどう受け止めることができるか？

５－３．Ｑの語録以前からこの諺があり、それを実際にイエスが何かで使って話したとしたら、イエスはこれをどういう文脈で使ったと想像できるか？（→アジア文脈からの課題の受け止めが関わる？）